

二〇二五年三月七日

留守番は紙の雛や駐在所
啓蟄に一步踏み出す赤い靴
ひもすがら啓蟄の庭存問す
満開の梅園見えて足早に
蜷の道お地藏さまの顔に見ゆ
啓蟄や抱かれし嬰のもしもじす
踏青や道行く子らがこんにちは
朝霞突き抜けて見ゆ湖の綺羅

二〇二五年三月六日

雨晴れて稜線著き春の山
文旦のでんとわり込む藤の籠
豆ひひな拡大鏡の置かれあり
春しぐれ翁の句碑を存問す

二〇二五年三月五日

風はまだ頬刺しくるも踏青す
静謐の闇夜を破る屋根雪崩

二〇二五年三月四日

五目寿司夫とふたりのひな祭り
野の花を手向けて雛を飾りけり
未だ春は遠しと夫へ朝の経
亡き夫の宛名でとどく春便り
代々の古雛並べ亭の窓
春愁や立て続けなる計の知らせ
喬木の走り根つかむ春の草

千鶴

せつ子

明日香

むべ

やよい

よし女

せいじ

うつぎ

わかば

あひる

うつぎ

明日香

えいじ

ほたる

もとこ

よし女

たか子

むべ

康子

わかば

康子

二〇二五年三月三日

老集ひ談論風発春灯し
大店の表札かくす燕の巢
犬ふぐり堆肥の上に顔だしぬ

二〇二五年三月二日

春愁や中々癒えぬ膝の傷
春靄が持ち上げてをる里の山
日を弾き春風孕む干しシート
蒼天に一筆書きの春の雲
春泥のぬた場に残る獣臭
嬰の声とどく帳場や雛飾る

二〇二五年三月一日

剪定を終へて展けし空仰ぐ
あたたかや抱かして貰ふ孫また
東風に乗り篠笛の音の届きけり
手を振つてくるは遠き田打人
春寒し廃業と聞く道の駅
あたたかや嬰の手しかと生命線
孫なれば抱き癖ごめん初雛

たか子

なつき

うつぎ

はく子

明日香

澄子

ぽんこ

うつぎ

なつき

明日香

よし女

むべ

みきえ

董雨

よし女

康子

毎日句会みのる選・二〇二五年三月九日